



図2 江東川で確認されたバイカモ類。(左)浮葉を形成した植物。(右)10枚の花弁を持つ花。

賀県自然保護財団 pp.1275-1294.

狩山俊悟・榎本敬・小島裕子・片山久・地職恵・稲若那典, 1997. 岡山県産バイカモ類の形態変異.

倉敷市立自然史博物館研究報告 12:93-99.

木村保夫・國井秀伸, 1994. バイカモ類の酵素多型と形態変異(要旨). 水草研究会報 54:32.

國井秀伸・井上功一, 1997. バイカモの成長と光合成. 水草研究会報 61:1-11.

村田 源・田中昭彦・山本茂信, 1995. 世界に誇る浜坂町の水と岸田川支流, 田君川・久斗川のバイカモ群落. 『兵庫県浜坂町自然の現況』(山本茂信), pp.20-37.

Wiegleb, G., 1988. Notes on Japanese *Ranunculus* subgenus *Batrachium*. 植物分類地理 39:117-132.

○小野有五著『川とつきあう』(岩波書店、1997年11月、142+19p, 1,400)

○樋口広芳・成末雅惠著『湿地といきる』(岩波書店、1997年5月、112+11p, 1,400円)

○守山 弘著『むらの自然を生かす』(岩波書店、1997年7月、128+12p, 1,400円)

「自然環境とのつきあい方」と題するシリーズのうち水草に関連あるテーマを扱っている3冊である。100ページあまりの手軽な本だが、それぞれに著者の個性が出ていておもしろい。

『川とつきあう』は、人間が「川をどのようにしてだめにしてきたか」をたどりながら、日本の川の現状と問題点、そして、これからの川のあり方について著者の考えを述べている。NGOとして実際の保全運動にかかわってきた著者だけに環境アセスメントや公共事業のあり方にまで話題は広がる。日本の川をとりもどすために私たちは何をしなければならないかを明快な論旨と読みやす

い文章で訴えている。日本の川問題の本質に迫る好著。

『湿地といきる』は、湿地の生物、人とのかかわりの歴史、湿地の破壊によって生物の世界に起こっている変化などを紹介しながら、湿地の果たしている役割を解説している。さまざまな事例から湿地が重要であることを訴えているのだが、少し性急すぎると感じた部分もある。最後は、湿地を守るための提言で、これ以上の破壊をくい止めるべきという基本的スタンスの提案から、私たちの日常生活において気をつけるべき点まで具体的に示している。

『むらの自然を生かす』は、農村が維持してきた生物多様性の成り立ちを、農村におけるさまざまな環境の構成要素やその配置、さらには人間の営みとの関係で明らかにしている。しかし、今やそのような身近な自然がもつとも危機的状況にある。人と生きものとの新たな共存に向けてのさまざまな試みと可能性を示し、あとは実行あるのみと結んでいる。(角野康郎)